

G&T社長・竹内宏の
磨き作業が楽しくなる!
失敗しない
磨き術
 - 試行錯誤の磨き体験記より -

竹内宏 (たけうちひろし)

ジーアンドティー代表取締役。1961年生まれ。1980年にマツダオート大阪へ入社し、1984年に独立し保険代理店兼中古車販売業を営む傍ら、カーディテリングに触れる。1987年に廃業し、テロソココーポレーションのグループ会社にカーディテリングの本部社員として入社。大手カー用品店にコーティングビジネスを提案し、自らも実験店で現場作業に従事する。その後自動車補修用品の営業経験を積み、2003年に再び独立してジーアンドティーを設立。サンマイト社サンドペーパーの東日本代理店として磨き関連商品を販売しながら、講習会を積極的に開催するなどアフターケアを重視した営業手法を展開している。



【第2回】「削る」ための磨きと「仕上げる」ための磨き

「失敗しない磨き」に適したポリッシャーとは？

前回は磨きすぎによる危険性と、仕上がりがイメージの設定について説明しました。今回はバフ目やオーロラマークの出ない仕上がりを目標として、そのために必要な準備、知識、技術、そしてツールについて解説していきます。

ポリッシャーについては、シングルアクションの電動ポリッシャー、エアポリッシャー、ダブルアクションポリッシャー、ギアアクションポリッシャーなどが一般的です。中には正逆両方に回転するものや、ローラータイプの特異なものもあるようです。それぞれ特徴がありますので、目的に沿って選択する必要があります。

最も広く普及しているのが、電動のシングルアクションポリッシャーで

す。価格が安く、振動も少ないので、毎日作業する方には適していると思います。しかし、研削力が強く、偏芯回転しないため規則的な傷が入り、磨き跡が目立ちやすいため、使いこすには少しコツが必要です。エア駆動のシングルアクションポリッシャーはさらに振動が少ないのですが、低速回転時のトルク調整を工夫しなければなりません。

ダブルアクションポリッシャーは偏芯回転する分、深いバフ目やオーロラマークができていくのですが、研削トルクが弱く、塗り肌の調整研磨やペーパー傷の除去には不向きです。

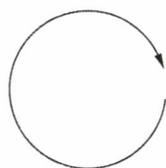
ギアアクションポリッシャーは適度な研削トルクがあり、偏芯回転によるバフ目、オーロラマークの発生を防げますが、ダブルアクションポリッシャーと同様に振動が大きく、研削力を出すには常に一定の加圧を維持する必要

がありますので、処理台数が多ければ作業者の負担が大きくなります。

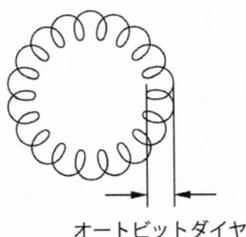
これらの特徴を踏まえると、処理台数の多いボデーショップは、シングルアクションポリッシャーを標準工具として使いこなし、満足できる仕上がりを得られるスキルを磨くことが最もメリットがあると思います。その上で、他の道具を補助的に使用すれば、さらに作業の完成度が高まるでしょう。



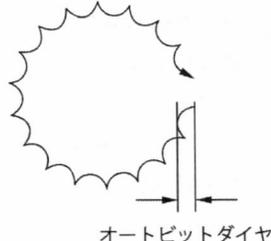
シングルアクション
ポリッシャーの回転運動

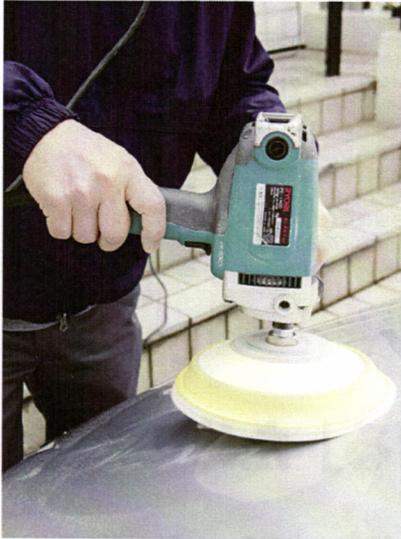


ダブルアクション
ポリッシャーの回転運動

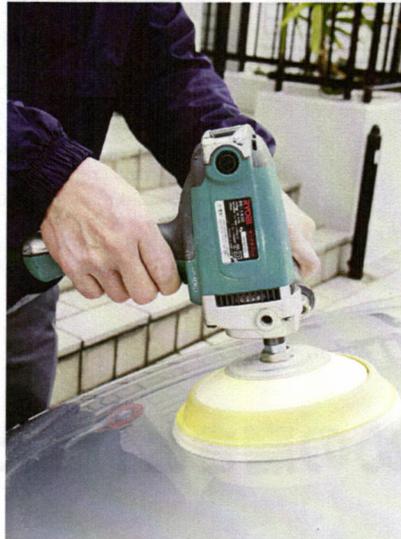


ギアアクション
ポリッシャーの回転運動

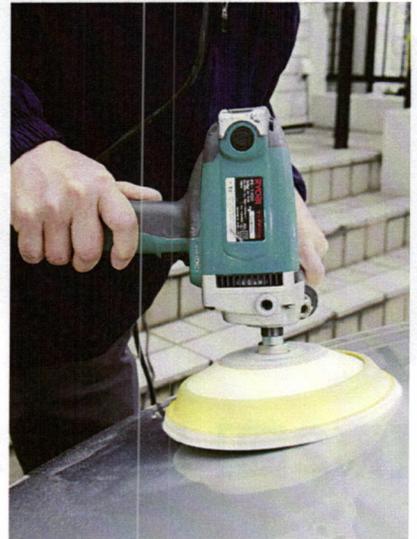




「削る」ための磨きでは、バフを斜めに強く当て、バフの角にトルクを集中させている



「仕上げる」ための磨きでは、バフを平らに当て、一定のリズムでポリッシャーを移動させる



「削る」と「仕上げる」を両立させる磨きでは、バフをやや斜めに、角が立たないように当て、ポリッシャーをできるだけゆっくり動かす

「削る」磨きと 「仕上げる」磨き 双方の習得を

私は元来、コーティング施工のための磨きを専門にしていたので、鏡面状に仕上げることを理想としていました。とにかく塗装面に傷を付けずにツヤを出すことを一番に考えていたので、コンパウンドやバフもそれを基準に選んでいました。

コーティングもワックスや有機ポリマーが主流で、塗膜も現在より軟らかかったため、時間を掛けて丁寧に磨き込めばそれなりにツルツル、ピカピカになりました。ところが、時間が経つと、消えたはずの洗車傷や、ウォータースポットの跡が現れてくるのです。30年近く前の話ですが……。それ以後、ようやく「削る」と「ツヤを出す」磨きを使い分ける必要があることに気付いたのです。

ある日、知り合いのボデーショップの作業を見ていると、なんと塗装面にペーパーをゴシゴシと掛けているでは

ありませんか。その後、タオル地やウール地のバフで角を立て、ゴリゴリと削っていたのです。「よく下地が出てこないな」と思いながら見ていると、やがてそれなりのツヤが出てきました。「でもバフ目は目立つな」と思いながら、興味津々に眺めていたものです。時々「仕上がらないから、とにかくピカピカにしてくれ」と、そのボデーショップから作業を依頼されたりもしました。

「そうか、ボデーショップの技術者は、削るのには慣れていても、ツヤを出すのは苦手なのか……。そんな体験から、両方を組み合わせる試行錯誤が始まったのです。

削ることと、ツヤを出す（仕上げる）ことは、同じ磨きでも別物と考えなければならないことを認識して以来、いろいろな素材のバフやコンパウンドを試しながら、磨き方も研究するようになりました。今でも、コーティング業者は「削り」が苦手な方が多いと思いますが、いかがでしょうか？

このような経験から、今の私は、ボデーショップの技術者にはコーティング業者のノウハウを、コーティング業者にはボデーショップのノウハウを伝えています。つまり、双方のノウハウを組み合わせた磨きがベストだと考えています。その内容こそが、この連載で皆さんにお伝えしたいことなのです。

では、改めてツールを選定しましょう。前述の通り、シングルアクションポリッシャーを標準工具として、今後の解説をしていきたいと思えます。機種はひとまず限定しませんが、回転数を調節できるものを選んで下さい。重量は軽いものと重いもの、それぞれに長所・短所がありますので、好みで選んで下さい。なお、私自身の好みとしては、軽い方が側面を磨く際に疲れにくいので、重い機種はさほど使いません。

道具が決まれば、いよいよ作業の始まりです。

次回は、作業を始める前に必要なことについて、お話ししていきたいと思えます。

(続く)